

---

# トラウマッ子世に蔓延（はびこ）る

藍亜夢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ラウマッシュ子世に蔓延ひまわらは

### 【コード】

27606D

### 【作者名】

藍里夢

### 【あらすじ】

過去のある出来事がきっかけで、ひねくれた性格になってしまった超美形男子高校生。容姿、学業、運動、性格、すべてを兼ね備えた完璧少女。その他個性的な面々が織り成すハチャメチャハートフルギャグコメディラブロマンス（注）ほとんどの登場人物が皆、なにかしらのものを抱えています。（コメディ+シリアル）×恋愛みたいなコンセプトでやっていけたらいいな。中途半端に終わってしまったらスイマセン、あしからず。

## 第一話・甘酸っぱい想い田（前編）

初投稿です。なるべく頑張って更新するよひこしますので、拙い文  
章ですが、どうか温かい田でみてやつて下せ。こ。  
宜しくお願い致します。

「ゆうちゃん見つけ！」

タツタツタツタツタツタツ

「あ～～みうちゃん、あつひや～～」

力コーン

「ゼエゼエ・・・ハアハア・・・やられたあ～～グヤジい～～～！」

「ハッヘッ~~~~これでまた、ゆうなやんがオードね~！」

「だつて・・・みつちやん咲はやすぎなんだもん・・・ボクおこつ  
けないよ～」

タツタツタツタツタツ

「オーケー！ またユウガオニなのか……？」

「あつ カイ・・・ど」にかくれてたんだよ～～～？」

「あつちの木の上だよ」

「カイくんは、きのぼりとくいだもんね〜〜？」

「ピース！」

「なんだよ・・・それって・・・・・」

「そんな」とよつ、「うむ。おまえ」れで、8かいれんそくでオード  
ぞ～～～？」

—

「ふー、ツマンナイ・・・カンケリなんてちつともおもしろくナイ  
・・・ボク帰るー!」

ウ  
!

「やれじやあ、アーリーでねおおい」とつむりへねへおひでをもカイ  
くとも、やれならこいでし

よへ」

「えひへまあ、アーリーへ、アーリー、ベリリニーピ。コウモルセドー、  
だつたり」

「アーリーまあいとなんべ、アーリーのおぞびだよーーー、アーリー  
ー、アーリー」

「だめ・・・・・かな?」

「しうがナイなー、みつひやんがそんないまあいとしたいんだつ  
たい、やつれあづよーー。」

「うそー、わたしもまあいとあだかひ、ねひへあひのかなまへ  
レッジパーーー。」

タツタツタツタツタツ

「よ～し～。じゃあね～そしたら、ボクが  
”ねどりわん” やる～。

“みっちゃん” おかあさん” やつて！ んでもつて、カイは  
あかちゃん” ！

「はい あなたー！」（ちゅつ）

「がーん！ー！ー！なんで・・みつわちゃんゴロゴロ”ねえつ”なんかしちゃうてんのー？」

「ふふふ、だからだよ〜ん」

「ゴウー！ おまえにきてナニヨー！」

「まあまあ、カイくん？おねがいだから・・ね・・・」(ちゅ)

「ありがと！ カイくん」

「 もういいっしー！」

「 でも、そのかわりつぎは、ぼくが、おとひさん、やるからねー。」  
「 ウもそれでいいな？」

「 わかったよ。そしたらカイが、おとひさん、ボクが、おかあさん、でみつちゃんが

” あかちゃん” だね

「 ガクッ・・・なんでそうなるかなあ・・・」  
「 もういいっしーみつちゃんわらいす、」

「 ううとーーみつちゃんわらいす、」

「 ふつ くくくく・・・」

「 ・・・」  
「 ・・・」

「 ・・・」  
「 ・・・」

「～たうがめんがめんべい

「～めんべいめんべいめんべい～」  
「～めんべいめんべいめんべい～」  
「～めんべいめんべいめんべい～」

## 第1話・甘酸っぱい想に出（後編）

読んでいただきまして有難いります。これから序々に「メテイ色をだしていきたいと思います。  
2、3日中には更新出来る?ような気がします(弱気

## 第2話・今おれじゃんけんする危機（前書き）

何とか更新する事が出来ました。句読点が、かなり  
めちゃくちゃで尚且つ、改行もあまり良くなかった  
ので読み難いようでしたら申し訳ありません。

## 第2話・今おれがやる時が危機

「……………へん…みっちゃん…ムニヤムニヤ…」

「……………へん…みっちゃん…ムニヤムニヤ…」

「ハツ…・・・夢…・か…・・・」

「クソッタレ! 最悪の田覚めだぜ! つたく…・・・」

（何度もだよ…・・・）んな悪夢で朝を迎えるさやなんなかつたのは…  
なにが悲しくて、よりもよつてあんな奴らの夢を見なさやなんね  
ーんだ…・・・）

俺はベッドから体を起こし、枕元、午前6時のアラームを解除する。  
そして、血圧を氣だるやうに移動しながら、  
机の引き出しを開け、田当ての品物を手に取り中から一本出して火  
を点ける。

ジユポツ

「フー——」

そして啞えタバコのまま、低い丸テーブル上の灰皿目指し一・三歩駒を進めた拍子に足に何かが当たつた。

（空き缶？何故こんな所に・・・・ああ思い出した、そういうえば  
昨夜風呂上りに、親父のを  
拝借して飲みっぱで放つておいたんだったな）

俺はその、〇〇〇ビールと表示してある350mlのアルミ缶を見て、沸々となにか例え様の無い苛立ちを覚え数回踏み潰した次の瞬間、無残に変形した”ソレ”を、思い切り何処に向けるでもなく蹴り付けていた。

ガコツ

すると”ソレ”は鈍い音を立てながら、一瞬で壁面の低い位置から跳ね返つて、俺の左足くるぶしを直撃したのだった。

その際に、思わず咥えてたタバコを下に落としてしまう。

俺は、激痛に顔を顰めながらやり場の無い怒りの矛先を、何処に向けてよいか解らず、例えるならばまるで反抗期の少年がはき捨てる様な口調で

「けつ！カンケリやママゴトなんて、所詮ガキのあそびじゃねえか！くそったれ！！」

荒げた声は、自分以外誰も居る筈の無いのであるが、空しく響き渡る。

ちなみに両親は、こんな俺に対し余程の事が無い限りは、自分達から特に何も言ひてこない。

（俗に言う放任主義ってやつか？…………違うな、あつと呆れてんだろ…………いや、むしろ諦められてんのかも…………）

幾分か痛みが治まつた俺は、こつしても仕方が無いと思い、取り敢えずテーブル上の灰皿を持ちつつ、机の位置に對になつている小さな車輪付きの事務用椅子に腰掛ける。

そして次は

氣を落ち着かせようと、おもむろに2本目の大タバコに火を点け、先刻起きたアクシデントの被害状況（八つ当たりの代償）を確認する。

その2 赤く腫れあがった左足のくるぶし

その3 現在の気分

（まあ、こんなトコか・・・）

（思えば、休みの間これといってダチとどつか遊びに行ったりする  
でも無く、かといって  
独り街をぶらつく気分にもなれず。バイト先と家の往復ばつかしだ  
った様な気がするぜ

・・・・・・・・・かといって別に気にしちゃいねえが。

ま、課題を出されなかつた事がなによりだな。もっとも  
高校生にもなつて春休みの宿題なんて、俺自身あまり聞いたコト無  
いが）

溜め息と共に吐き出す紫色の煙に自然と目がいく。果たして”ソレ  
”は俺の予想通り  
上に広がって、やがて音も無しに僥々消えてゆく。

（一応、今日から新学期なんだよな・・・人によつちやあ、春は  
”始まりの季節” なんて

ほざいてるヤツラがいるけど、そんなもん俺に言わせりゃ知ったこ  
つちやねえーてコト

まあ、強いて連中の言葉を借りてオレ流にアレンジすれば、  
正に”ただカツタルイだけの日常の始まり” って訳

「フわあーー」

俺は、欠伸しながらフィルター部分まで残り少なくなってきたタバ  
コを焼き消し、感傷  
に浸る作業を一旦中断して、登校の支度を整える。  
時計に目をやると、現在午前6時25分

（少しロスッたな・・・）

取り敢えず、クローゼットに掛けられているハンガー（ホコリ除け  
の透明ビニールが被さった濃紺のブレザー・若干丈の太い灰色のズ  
ボンの2点セット）とYシャツをそれぞれ手に取り、張り付いてる  
クリーニング屋の両方のタグを外していく着替えてゆく（その際Y  
シャツの胸ポケに予め品物を忍ばせておく）。終えるとその足でタ  
ンスに向かい、室内スリッパから靴下に履き替え、鞄を持ち而去  
つ発という時に

（さつきから気にはなっていたが、4月だつてのにやけに暑い日だ  
な今日は・・・尋常じゃねえぞ！？  
この分じゃ昼間は季節外れの蝉が鳴くんじゃねえのか？フツ そんな  
ワキヤねーか（笑））

等という有りもしない冗談・・・・・・・・・・・・もあながち  
的外れでは無かつた事に気づく・・・否！気付かされる！！

何故ならば

「ヒイ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

ヒひひヒひヒひヒひ火火火火火火火火火火火火  
火火火火火火火火火火火火火火火火火火火火

「かつ・か・かかか火事だあうあ～～～！？！？！？！？！」

（ハイ オレ見事にテンパッテマス、ミトメマス。ドウもスイマセ）

つてヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！ヤバイ！  
自己分析してるババイじ  
やねえ～ぞ！

(そつ、そうだ！　俺が今、手に持つてる鞄で叩いて消せばなんとか…。  
いや！　無理だ、火の勢いが強すぎて近づくのもままならねえ！)

（だが、何でこんな事になつちました・・？さつきまでのシリアル  
な俺は一体全体  
何処に行つちまつたんだ！？　じやなくて原因だよ！、火事の原因  
！）

# 記憶を つかう よ

冴えない1人ツツコニもそこそこに、俺は必死に僅か20分前後の記憶を引っ張り出そうとする。が目前の逼迫<sup>ひっぱく</sup>した状況が容赦なくこの俺から思考力を奪い取っていく・・・・・・

(落ち着け自分! そうだ、こんな時こそ一服して……!)

その直後、俺は悟った。すべて理解した・・・

（今吸おうとしてたタバコが、確か今日3本目・・・2本目はしつ

かり

灰皿で搔き消した筈だからこれも原因ではない・・・残されたのは・・・

・ ・・・そう一ズバリ・・寝起きの呑えタバコにあつたのだ！！！

あの時俺は、空き缶に腹を立て壁から強烈な”しつペ返し”を

喰らい

その際咥えていたタバコをカーペットに落つことしていた！！！

間抜けな俺は、その事に全く気づかずほつたらかしにしたまま、転がっている

”ソレ”が、カーペットに引火し今に至る。）

大方、こんなところだろう・・・・

俺は思わず天を仰ぐ・・・・・・・・J E S U S ! と

なんていった



## 第2話・今までしへそこにある危機（後書き）

この第2話は、作者本人の実体験が元ネタとなっています。これを読んで下さっている方も、火の不始末にはくれぐれもお気を付け下さい。

それと、本文最後のJESUSは（ジー・ザス）と読ませます。  
“救い主”といったニュアンス  
でよく昔のアメリカ映画等で、登場人物が自分ではどうする事も出来ない事態に陥った際、  
呆然とした時使う言葉だったかと記憶しています。（間違いだった  
らスイマセン）

### 第3話・部屋ヒヤシと鬼子母神（前書き）

若干、長めでクドイ文章になってしまった。  
苦手な方は、ご注意下さい。

～前話からの続き～

身から出た鎧とはいえ、自身の不注意から危機的状況に追い込まれ  
てる俺。四

（それにしても、こんなになるまで気づかないオレっていつたい・・・）

振り返つても後の祭り。もはや、一刻の猶予も許されない。何故なら、迫り来る炎だけではないもう一つの難問が、俺に襲い掛かっているからだ。

「ウッ！ ゲホッゴホッ」（窓だー、まず窓を開けてー）の煙を何とかしねえと・・・（

袖で、鼻と口を覆いつつ素早く窓を全開にする。

そして俺は、脱兎の如く部屋から退避し階段を駆け降りて！と、あつそうそう、俺の部屋は2階にあるのでした～～つ・・・て（我ながら危機感ゼロだなオイ）

「モモちゃん！ 火事だ！ 火事！ オレの部屋が燃えてんだYO  
おーーーーー！」

キツチンで、朝食の準備をしていたとおぼしき我が愛しのマイマザ  
ーは、俺の言葉を  
聞くや否やダッシュでバスルームに向かつて行く。すかさず俺もそ  
の後について行き、

二つ重ねにしてあるバケツの片割れを無言で俺によこすと、すぐに  
彼女は浴槽の残り湯（水）をバケツ一杯汲み取り、凄い勢いで二階  
へと駆け上がりつて行くのだった。  
慌てて俺も後に続く。

途中、（うわっ！ ごほっ！ スゲー煙<sup>ケム</sup>イ！ ハンパねエなこりや・・・）

『げほっ！ ごほっ！』 「ゲホッ ゲホッ！」

煙に悩まされながら何とか現場に到着した俺達は、バケツの中身を  
火元に向けてそれぞれ  
ぶちまける。

オフクロと俺の的確な処置と連携が功を奏し、何とか鎮火する事が  
出来た様だ。

ザバ<sup>アツ</sup>  
バシヤツ

不幸中の幸いが、机上の「スクショップ・部屋の隅に位置する20インチ薄型液晶テレビ・エアコン」といったMY二種の神器もどうやら無事らしい。念の為それぞれ動作確認もした、間違いない。

やれやれとほつと胸を撫で下ろしたのも束の間・・・

『この大馬鹿者があああああ……一体これ（惨状）はどうゆう訳かあああ！！！！』

俺の耳元で、軽く鼓膜を何十枚も突き破れそうな数百dbもの大音量を発する

この御方こそ、姓は度会（わたらい）名は桃代（ももよ）身長173cm 体重チヨメチヨメ（知つたら最後その日が命日）kg

3サイズ上からB95 Wズキュー H92 血液型A型、実年齢36歳見た目どうみても20代前半、街を歩けば

すれ違う人のほとんどが、一度見せすにはいられなくなる程？の圧倒的な美貌で、誰が名付けたか知らないが

通称”見返りモモちゃん”として高校在学中に颯爽と芸能界デビューを果たし、一世を風靡した後（のち）

卒業後、当時史上最年少でミスユニバース日本代表に選出され、世界大会でも見事第3位に輝く等の実績を残した

というのがあくまでも表の顔。

果たしてその実態は・・・・・・

次号に続く！・・・

ウソです、スンマソソン・・・ちゃんとします、ハイ。

果たしてその実態は・・・・・・ 握力 右98 左87 背筋

2

66 の右利き、ストリートファイト・腕相撲等、過去  
数百戦無敗（相手は男女問わず） 柔道・剣道・空手・テコンドー・

少林寺拳法・その他諸々の武道を極め、

それ等の段位を合計すると軽く30は超える。俺にとつて母親であることは勿論、時には姉貴代わり、

またある時は人生の師匠といった存在。あと怒りせたアマジ、シャレになんないって事も付け加えとく。

（俺はあつといの女には、一生頭が上がりないんだろ？な・・・）

モモちゃん（オフクロ）に関する説明について、今日の所はこの辺で勘弁してくれ・・・いずれまた次の機会に・・・

『といふで、其の方先程から一体誰に話しかけておる？』

「ゼン・ゼン・・・」（今、モモちゃん何か言つてたか？・・・つーか、こいつどう説明疲れでそれドコじやねーし）

『い』苦労な事だ・・・』

「あつそつだ、こんな事してる場合じやなかつた！俺、これから始業式出なきやなんねーからわへ、モモちゃん、悪いナビの部屋の後始末ヨロシク！！」

「んじゅやーゆーハード」と皿こつつ俺が皿屋から出で行い、つとするのを、オフクロが見逃す筈も無く

『待て！私はまだ、このボヤ騒ぎの理由を聞いてはおひなが？まあ、おおよその見当は付いてあるが・・・それより何だ！その態度は？反省の色が全く見受けられん！』

あつけなく襟首を掴まれ、凄い勢いで後ろに引き戻されるオレ

「ウゲエ~~~~！ モモちゃん・・・絞まるつ・・・ノ、ノドが絞まつて・・・ぐ、苦し・・・」

『まつたぐ、大袈裟な』

ようやく解放してくれたかと思つた矢先、オフクロは素早く俺の前方にまわり込み、仁王立ちで部屋の出口に立ち塞がる。そして間髪入れず、なんと俺の懷に手を突っ込んできた。

「えつ！？ ちょ ちょっと待つてくれモモちゃん！ 朝っぱらからそんな・・御無体な・・・ オレ、近親相姦の気はねえから！！」

『愚か者！ 私は自分の息子を襲う程落ちぶれてはおらぬわ！』

ズビシッ

「ぐおおおお~~~~~！！」

どうやら脳天に手刀を喰らつたらしい・・・重い衝撃が、頭部全体を襲う。

夜でもないのにホシが見えるのは氣のせいか・・・だが、これもある程度は手加減してくれてるのは間違ひ無い。（本気のモモちゃんはこんなモンじゃないからな・・・）

ちなみに、未だオフクロの右手は俺の懷から離れてくれない。まるで何かを探そうとしてる様な手の動き、この状況は俺にとって・・・

（ヤバイ！ ×10 ・・・”アレ”が見つかっちゃう！  
・・非常にマズイ！！ つてああ～ シャツのポケットを触らないで  
～ママつたら～～）

そういひしてゐ内、ついにオフクロはお皿でのブツを探り当てた  
らしく、すかさずソレを  
”喰われかけの哀れな子羊” の前に突きつける。

（うわ）～～このヒト微笑んでる～～出たよ必殺～～モモちゃんスマイル”～目は決して微笑んでいないバージョン～～が・・・  
終わつた・・・・・・・・・・・・何もかも・・・・・・・・俺の16年余り  
の短い人生・・・  
父上様、母上様、先立つ不幸をお許し下さい・・・あつ、もつとも  
目の前のアンタが手を下そうとしてんだけネ）

そして・・・

「これはなんだ？」 と田の前に見せ付けられたのはまじく

” 処刑台への片道切符 ” (SEVE STAR BOX) -!

「 む、 むむむ・・・ 」

『 む? 』

「 言懷かしの ” シガレットチヨコ ” だぴょん! 」

『 ほつ? そつか・・・ 貴様にはこれがチヨコに見えると・・・ なうば早速食してみるか? ん? 』

“ モモちゃんスマイル ” ～般若バージョン～ } で強烈なプレッシャーを

俺に『 えてくるオフクロ 』

同時に、俺の目前に掴まれている ” チヨコ ” を彼女が軽く握り潰す。まるでティッシュペーパーを丸めるかの如く、いとも簡単に・・・ (あの)、もしもし? ” ソレ ” もはや原形留めてナインすけぞ・・・ てかオレ初めて見たよ、タバコがゴルフボールに変わつてくイリュージョンを・・・

そして、これは同時にオフクロが俺に向けてのメッセージであると いう事を意味する。

次にこうなるのは キサマ だと・・・

(キヤーーーー！ ムスコを”貴様”呼びますか？ イヤーーン、  
貴女はわたくしを  
一体どうなさるおつもり！？ そんないでーーー  
かお  
表情なさらな  
せつかくの美貌が台無しよ？ ）

こうして馬鹿やつてる間にも、状況は刻一刻と悪化してるのは自分  
でも分かってるつもりだ。

(何か有効な打開策はないものか・・・) じでオレに残された選択  
肢は・・・)

1 無謀を承知で出口に立ち塞がる ”モモちゃん人類最凶殺戮破壊兵器”  
に戦いを挑み正面突破を図る

2 誠心誠意、心からの謝罪をして許しを請う

3 開け放たれている後方の窓からの華麗なる大脱出

以上！ (少なつ！ どんだけ？ 選択肢、こんだけーーー！？)

まあ仕方無いので、現時点この3パターンをそれぞれシミュレートしてみる。

まず1番・・・・・ つてバカア！… 作者馬鹿だろつー… そうまでしてオレを口ロシタイノ？

物語終わっちゃうゾ… 開答無用で却下

♪♪♪

で2番・・・・・ うーん、まあ正面突破に比べれば遙かに常識的かつ良心的な答えか？

モモけやん優しいから、きっと骨の2・3本で許してくれるかも・・

でも問題はそ、誠心誠意の謝罪って事は＝

十中八九土下座つしょ？

床、ビックチョリよ？ せつかく着替えたのに濡れちゃうよ？ ま、死ぬよつマシだけぢや

いよいよ3番・・・ これは問題点多いよー脱出つて言つケド、この2階だぜ？華麗なる脱出ならぬ”転落”だよな間違い無く

作者、オレの運動神経分かってる？ 良くて

骨折、悪けりや 全身打撲で即入院コースよ？

それに、運良く飛び降りた際のダメージが少なかつたと仮定してよ？

その後オレビツヤつて登校すんの？ 靴も履

かずに？ 1階も玄関も全部鍵掛かってんだぜ！？

そしてオレが最も恐れている最悪のシナリオ、

それは窓までたどり着く間に起こる・・・

えつ？たかだか数メートルの距離だろ？

ハア～～～作者はこれだから困る<sup>バカ</sup>・・・

言つたでしょ！床ビックチヨビチヨなのよ？

カーペットも水気を含んで、ただでさえ滑りやすく

なつてんの！しかもその先は水浸しの”フロ

ーリングゾーン”ですけど？すつてんコロリンつて

ピーチ姫に簡単に捕まっちゃうゾ！ そう

なつたら酷いヨ～、ピーチつてば卑怯な事が大つキライだから

想像しただけで・・・・・・・・ギヤア～

-----!

結局どの案もとても実行する気にはなれず、かといつてこいつしても仕方無いと思い、  
遂に俺は自分の中である決断を下す。

(こうなつたらもう”アレ”使うしかねえな・・・しかし後々スゲ  
ー不安だな、なんたつて実戦で使うのは初めてだもんな・・・  
オレ自身、使用後どうなつちまうのか全く想像つかないが・・・  
いや！ 迷つてゐヒマはねえ！今はこの窮地を逃れるのが最優先事  
項だ！ やつてやる！～）

「禁断奥義・・・”魔胃夢間井無”！！！」

『？？？』

説明しよ、この術を唱えた者は自己の精神力を急激に引き上げ、  
リミッター  
限界点を突破させると同時に一種のトランクス状態に陥り、正に”天  
上天下唯我独尊”を地でいける程、手が付けられなくなるとゆう怖  
ろしい技なのである！（まあ早い話が相手に相手に對して常に上から目  
線で絶対的優位に立てるってワケ）

だがこの技は、あくまでも自身のメンタル限定の効果な為、（お空  
をとんだり、力ハメ波出したり、大型トレーーラー持ち上げた  
り）だといった肉体的、超人的な活躍は無論、一切期待出来ない  
・・・ショボッ！

尚、この技は術者の身体にとてつもない負担が掛かる故、使う場面  
が非常に限られる。ちなみに技のネーミングと効果・小説のストー  
リー・登場人物のアイデンティティ・等との関連性は一切無い・・

主人公

「お遊びはここまでだピーチちゃん！　この我輩をここまで追い込んで

だのは、あんさんが初めてや……よからう！見せてみよ！「うぬの眞のチカラを！！ボクちゃんの持てる全てのポテンシヤルでYOUを可愛がつてあげよつ・・・カモン！Pちゃん！！」

『さつきから黙つて聞いておれば、男のくせに キヤー、イヤーンだの ウツフーン だの・・・訳の分からぬ事をブツブツと・・・・・・あげくの果てに親に対して数々の暴言・・・これは教育的指導が必要な様だな！！・・・』

『え？ 何でPはオレが思つてるコトが分かるんだ？ オレもしかして、第3話の最初から全部口にだしてた？』

『ああ出でいたさ！・・・つて？ ちょっと待て！ お前、今P」と言つたか？

私の事を”P”と！？』

「言つたけど、それが何か？」

『そ・それが何か？ だと貴様～～！ ”P”だぞ！ ”P”！？ もはや”度会桃代”のカケラすら留めておらぬではないか！？』

』

「ああ、そういうえば”P”は元世界ミスユニバース3位だったつな・・・やっぱ、グランプリじゃないと納得いかないか？」

』

『全く会話が噛み合って無いではないか!? ておるので無い! 何故私がよりもよつて、息子のお前から”P”、”P”言われなくてはならんのだ!?

「マツタク・・・Pつて、ホンとノリ悪いな」グラんプリ取れなかつたんダカラ、それなりのリアクショնつてもんがあるだろ？ハイ！LOOK、LOOK、注目・・・例えはこういう風に、顔を思いつきり歪ませて・・・「M グランプリ取れなくて非常にクヤシイですっ！」「ってな具合に・・・そんなんだから”P”はいつまで絆つても、ピ（自主規制）が、ピ（この小説は15禁なんでアシカラズ）で、ピ（だからムリなんだつてば！）のまんまなんだYO！解つたか？P？」

ブチツ

覚・悟・は・よ・い・な  
?

（なんかクラクラしてきた・・・耳鳴りもある・・・。）

！・・・副作用つてやつだな、どうやら”魔胃夢間井無”の効果が完全に切れたらしい・・・いつの間にか視界も真っ暗だし・・・（

俺は、自身が前のめりに倒れ込んでいくのを感じる。（そのままじや・・・いや・・・もう煮るなり、焼くなり・・・ど・・・う・にで・・・も・・・）

『？・・・お・おこ！ 優斗？ 一体どうした！？』

（・・・・・・？）

どうやらモモちゃんが、俺を抱きとめてくれたらしい。心配してくれている雰囲気は十分に判る。顔面から床に激突する事態は、回避できたみたいだ。代わりに、大きくて張りのある柔らかいバストが、顔全体を優しく覆っているのを感じる・・・と同時に頭から首筋に掛けて、モモちゃんの長くて艶のある黒髪が包み込んでいる事もおそらく・・・

（もしかして、オレ・・・たすかつた・・の・・・か？）

すっかり安堵しきつた俺は、『”モモちゃんスマイル”～聖母バージョン～』を感じ取りながら安らかな眠りにつくのであつた。

『ふう、またく世話の焼ける息子だ・・・一時はどうなる事かと・・』

## 今朝の教訓（むちゅうのきょうくん）

- ・思つてゐ事をなんでもかんでも口に出さない
- ・モモちゃんに向かつて”P”は禁句
- ・主人公の名前が”優斗”だという事が判明
- ・”魔胃夢間井無”（単なる挑発）は今後封印
- ・自室に消火器は必須

モモちゃん『禁煙せー!』

優斗「ムリ!」（即答）

モモちゃん『いつその事、スプリンクラーでも付けるか?』

優斗「それだけは!」勘弁を・・・

モモちゃん『いや・・・お前にではなく、あの男にだ!』

「作者オレ  
かいつー?」

優斗「よつ、馬鹿作者！」

作者「てめえ・・作者をつかまえて開口一番バカとはなんだ！」

モモちゃん『私も優斗の意見に賛成なのだが・・・』

作者「”P”まで・・・』

ドゴー！バキッ！グシャ！ガス！ゴス！

作者「あれ～～～～！」

優斗「おつ！飛んでつた」　めでたしめでたし」













### 第3話・部屋とメシャツと鬼子母神（後書き）

やつてしまひました・・・いろんな意味で・・・  
もつじうなりや、後は野となれ山となれつてな具合に・・・スイマ  
セン一ホント調子オレについてどうもすいませんでした!! 何か謝つて  
ばかりだな作者

## 第4話・満たされないひと時（前書き）

今回は少し抑え気味にしました。

## 第4話・満たされないひと時

「フあ～～～、よく寝た～～～」

久しぶりの心地よい目覚め。正に気分爽快の筈が・・・  
(あれ? オレなんぞ、寝巻き姿に? こいつの間に着替えたんだ?・  
・・・・・)

辺りを見渡すと、何故かそこにはリビング。時刻は昼の11時18分、  
即ち GAME OVER

「はあ――・・・・」(ハイ、ハイ何となく分かつてはいたさ・・  
・「リヤ完璧に遅刻だ、イヤ最早そういうレベルを通り越してるな・  
・・)

『優斗! 風呂沸かしといったから、さつたと入つてこい!』

キッチンから声が掛かる。

「モモちゃん! オレ何でパジャマなんだよ? それに居るん  
だつたら、起こしてくれよ~ 5時間近くも放置プレイはマジカン  
ベンだぜ~～～」

少し間が空く

新聞を見てみる、新聞を・・・  
何、寝ぼけである？

言われて渋々、朝刊を手に取る

（5時間じろか、よりによつて丸一日以上もぶつ通しで眠つてた  
のか・・・オレは？ でもこんなになるまで何故・・・）

モモちゃんに抗議しようとするも、まるで先手を打ったようだ

『起こそうとはしたぞ？ 叩いたり、揺すったり、関節極めたり・・・だがそんな事もお構いなしに、お前は爆睡しあつてからに・・・さすがの私もお手上げだ』

（何かちょっと違う田の単語がめりこむや気になるんスケド？  
” 関節” つて……）

そういえば、体のあちこちが痛む。昨日の激闘のせいで無いのは確かだ。たいした事はない、それよりむしろ汗が乾いて全身が気持ち悪い事の方が、俺には我慢ならなかつた。

そのハーフパンツの内側、Hプロン着けたモモちゃんがキッチンから姿を現し

『いいから早くしとけ。一風呂浴びてから一度は言わんぞ。』

声のトーンは、多少不機嫌モードが入っている。

「分かつたよ！　あ、でもその前に確かめておきたい事があるんだ  
ケド？」

何だ？

「オレが寝てる間、パジャマに着替えさせてくれたのひょっとしてモモちゃん？」

先刻から気になつてた疑問をぶつけてみる。

『・・・そうだが・・・だつ、だとしたら！ それが、な、何だと  
いつのだ！』

(何故、顔を赤らめる？)

「いや、別にちょっと気になつただけだから！ あんまし深く考  
ないでよ？ ねつ？」

收拾が付かなくなりそつなので、この話題はお開きにしておとなし  
くバスルームへ向かう事にする。

洗面所には、丁寧にたたまれた真新しい下着類がカゴの中に、アイ  
ロン掛けしてある制服とソシヤツがハンガーにといった具合にそれ  
ぞれ準備してあつた。風呂上りにこれを着て行けといつ事らしい。

(こつは有難い)

俺はモモちゃんのさり気ない気遣いに感謝しつつ、着ていた衣類を  
片つ端から洗濯機にぶち込みバスルームの中へと足を踏み入れる。

（まずはこのベトベトの体を何とかしねえとな・・・）

育毛剤入りのシャンプー（別に親父もオレもハゲではない！ 断じて！！ あくまでも将来的な視野を見据えて）で髪を、フレグランス（香水入り）ボディソープで全身の順に洗い流し、浴槽に浸かる。

温泉成分配合の入浴剤の匂いが、鼻孔を撻る。<sup>くすぐる</sup>若干香料が効かせてあるらしい。

（温泉といえば、昔よく家族みんなで行つたよなあ！ 今度オレの方から誘つてみようか？ いや、やめとこう・・・モモちゃんはああ見えて、家事やちよくちよく問題起こすオレの事とかで気の休まるヒマ無いだろ？ し、親父の方も仕事忙しそうだし、無理言つて困らせる歳でもねえからな・・・）

（でも楽しかつたな、あの頃は・・・家族4人で・・・。・・・。  
くそっ！ なんで今更あんな奴の事を考える？ いかん、いかん、  
別の事を考へろ！別の事を・・・）

「はあ～ たまらん、正に今至福の時だぜ・・・」

全く実感の湧かない独り言を無理に呴く。 余談だが、湯に浸かっている際におそらく日本人の3・4人に1人は口にするであろう、”いい湯だな”・”極楽、極楽”等といった言葉は俺的にあまり好みない。だから何だ？と言わてしまえば、それまでだが・・・

（不毛だな、もつぱるとするか・・・）

これ以上、今の俺にとつてあまり居心地が良くないこの場に居たら、また余計な事を考えずに要られなくなる恐れがある。

”カラスの行水”も程々にして、俺はバスルームを後にすることにした。

「”家族みんなで” か・・・」

蛇口から滴り落ちる水滴に、搔き消されそうな一言を残して。



## 第4話・満たされないひと時（後書き）

ここまで”主人公”と”モモちゃん”だけで話を引っ張つてきましたが、さすがに辛くなってきたので次話あたり新顔を入れたいと思います。

## 第5話・Little devil & satan(前書き)

後々のストーリー上、ある程度重要なフリになる(予定)ですので自分なりに、少し気合入れて書き上げました。

3月29日、本文を若干修正しました。

今、俺は風呂から上がってリビングにいる。

モモちゃんは、相変わらずなぜか機嫌が悪い。

お世辞にも精神衛生上、あまりいい雰囲気とは言い難いと察した俺は、当たり障りの無い話題を振る事にした。

「そういえば、もう最近暖かくなってきたよね？　さすがに春なんだなって」

『「そうだな……だが、お前のようなやつが増えて困るのも頂けないがな……』

（やうぐるか……）

「モモちゃんひつでー！　そいやつて純粋で無垢のいたいけな美少年をからかって何が楽しいのさ？」

『「どこの世界に煙草の不始末で、部屋を半焼させる純粋で無垢のいたいけな高校生がいるのだ？」

（あれ？　オレが言った最後ん所はスルーなんだ……ナンカ悲シクね？）

『まあ、やつてしまつた物は仕方が無い・・・それより、学校の方はどうするのだ？ こうしてゐ間にも、時間は刻々と過ぎていくのだぞ？』

（ハイ、仰る通りでゴザイマス・・・）

モモちやんの正論攻めになす術が無い俺は、大人しく登校の準備を急ぐ事にする。

（とこつても、制服は着てるし後は椅子の場所に転がつての鞄を持つて、出発するだけなんだけどな）

「じゃ、そろそろ・・・」

鞄を持ち、とあつビングを出て行こうかと言つた時に

ぐう〜

およそ、生きとし行ける者全てが避けて通れない生理的欲求が、俺の腹から素敵な音色となつて現れる。

（あつちや〜！ よりによつて、こんなタイミングでかよ・・・そうこやー昨日の晚から、何にも食つてなかつたな・・・）

『・・・玄関で待つてろ』

とモモちやんはキッチンへ入つて行く

「うるさいな。」

これが学校でなくて良かったと、少しホッとしたが、玄関に移動し、靴を履き待っている俺。

程なく、モモちゃんが弁当箱らしき包みと、なぜか四つ折りの紙を持ってそれ等を俺に渡す。

「サンキュ、学校着いてからむつべ食つよー。あとコノ、この紙一体何なの？」

『ああ、壇つの忘れておったが昨日の夕方に、私が買い物から帰るとFAXが届いててな、どうやらお前宛てらしいぞ』

「やうなの？　ふうん……。」

俺はたいして気にも留めずに、紙を無造作にポケットに突っ込む。

『見てかなくていいのか？』

『いいよ、後で確認するし、そんじゃオレ行つてくからー！』

怪訝な顔をするモモちゃんを残し、俺は玄関を出る。

（はあ～、こいつからがシンディんだよな・・・）

自転車をこじぐペダルが、やけに重たく感じられる。  
何といっても俺が住む緑ヶ崎市<sup>みどりがさき</sup>の自宅から高校まで、大体30km  
以上の距離がある。

（まず、駅までチャリで約20分、そつから電車を三駅、最後にスクールバスで15分少々・・・もつと自宅から近く、楽に通学出来るトコもあつたうに・・・マツタクもつて、ホント頭が下がるよオレ自身に・・・ま、自分で決めたコトだから仕方無いっちゃ、そうなんだけどな・・・）

やがて何とか、”最初の目的地”に到達した俺は、月極で契約して  
る近場の自転車置き場でチャリに鍵掛け、構内の改札を通り、上り  
のホームにて電車を待つ。

来るまで13分あるらしい。（やつぱ、今の内腹、じしりえじとくか・

・・・）

傍の自販機で無糖の缶コーヒーを買い、近くのベンチに腰掛ける。  
そして、おもむろに鞄から弁当箱を取り出し、包みを解きフタを開  
けて中身に手を付ける。

（相変わらず、モモちゃんの弁当はこいつ見ても美味そつだ、定番の  
出汁巻き卵や海老フライはもちろんの事、ごぼうの牛肉巻き、かぼ  
ちゃの煮付け、磯辺揚げ、等の脇役陣も花を添える。こいつたオ  
ーネドックスな品々でも、愛情を込め手間隙掛けた料理は自然と、  
人を幸せな気持ちにさせてくれる）

「もぐもぐ・・・つん、じつや中々・・・じつじつ・・・はむはむ、いいカンジだな」

「モモちゃん、じつじつさん・・・」

俺はすっかり満足して弁当を平らげる、その時一度いいタイミングで電車がやって来た。ドアが開き、そのまま乗り込む。

（朝と違って、やつぱこの時間帯は空いてていいな・・・座れるし、なんつても楽だし）

窓枠の背もたれに片肘を掛け、缶コーヒーを飲みながら、つかの間のまつたり感を満喫する。

20分ほど後

まもなく米戸部一、米戸部です

車両内アナウンスで、無情にも俺の貴重な”安らぎタイム”は、そこで終了を告げられる。

数十秒後、米戸部駅に停車した車両のドアが開く。

そして床に飲み干した空き缶を放つぽつて、俺は下車した。

学校行きのバスは、乗客が俺一人（当然ながら）といつ事意外、特

に変わった事も無くそのまま最終目的地に駒を進める。

「着いたか・・・」

”県立米戸部第一高等学校前”と表示されたバス停で降車した俺は、校内の時計塔に目を向ける。

（午後1時26分・・・やばいな、もうひとつくらい限が始まってるじゃねえか・・・。そういうば運動場で体育の授業中のクラスを除いて、他は静かなもんだ・・・）

どうせ今更慌てた所で、どうしようも無いと思い、俺は通常のペースで校舎を目指し歩みを進める。

？？『県立米戸部第一高校、通称”ヨドイチ”又は”米戸高”。全日制普通科の公立高、偏差値は県全体で中の下。

全学年の生徒総数473名、内訳は、一般ビープル65%、優等生、体育会系、オタッキー、それぞれ10%  
ヤンキー4%、アウトロー（変人）1%、生徒会は存在するも、殆ど機能せず。

部活動は陸上部やソフトボール部等、一部の運動系を除いて特に目立った実績は無し。

近年稀に見る少子化傾向の煽りで、生徒数が少ない事以外、ドコにあるいたつて普通のガツコ～ぽよん

以上！ 説明はこんなトコだダーン！！』

「のわつ！？・・・て、テメエ、<sup>いつ</sup>一体何時から居やがつた！？」

（うわ～、サイアクだ・・・来て早々、とんでもない奴に捕まつち  
まつた・・・）

？？『ほえ？ いつからつて？ そんなの決まつてるボヨン ゆうどが  
バスから降りて、校門に入つて来たときからだダーン』

（こんなマネする奴は、オレの知りうる限りアイツしか考えられん。  
・・しかし何所から、どうツツ「こんで良いやら・・・）

「・・・・・・あのな、瞳子？ お前、全然気配無かつたぞ？ あと、今授業中だろ？ 大遅刻してきたオレが言つのもなんだけど、お前何故こんな所うるうるしてんだよ？ それと、目のやり場に困るその服装！ なんで一昔前に流行つた、某美少女戦隊アニメヒロインの格好してんだよ！ ここは場末のイメクラかつての！ 学校にコスプレして来てはイケマセンて、周りの人に教わらなかつたか？ 親御さんが泣くぞ？ 最後に、オレが何時お前に”米戸高”についての説明を求めたよ？ つーか、そもそも”アウトロー”（変人）のお前なんかに、偉<sup>ら</sup>そうに講釈されたくナイつての！？』

（オレの目前に、上目使いでこちらを見据える、小柄で華奢なツインテールの女の子・・・本名、<sup>まつねのへとう</sup>松延瞳子 言葉遣いや、たたずまい

がいやが上にも精神年齢の幼さを窺わせる・・・「イツとは中学の時からのつきあいで、一応同学年である。まあ男のオレから見ても、その小動物を連想させるつぶらな瞳、ピンク色した可愛いほっぺで、”守つてやりたいオーラ”を全身から撒き散らす、”米戸高の男共”が彼女にしたい娘ノ〇二”（オレ的にはカンベン）に位置する存在だ。  
・・・・・そのモンダイの瞳子姫が・・・

『そんな・・・つづく、グスツ・・・』

（ヤバッ！ こんな場面誰か（特に野郎共）に見つかったら、100パー俺悪者やん・・・てか消サレテシマウ・・・）

「あ、あの、瞳子！？ オレ言い過ぎた！わ、悪かつ・・・」

『そんな・・・そんなにいつぺん色んな口ト聞かれて、ワタシ馬鹿だから分かんないよ――――！ 1口ずつ質問してよ――――！ ゆうとのバカア―――― うわあ～～ん――！』

（なんですか？・・・つーか、怒るポイント”そこ”かい？――）

（そもそも、自分で自分を”馬鹿”と言い切ったオンナに、すかさず”バカ”呼ばわりされる屈辱・・・）

あまりの理不écさて、もはやブチギレ寸前の俺。

（くそ――！・・・もつこいつなつたら、たとえ女・子供といえど容赦しねえぞ――！――）こはガツンと一発このアマにかましたら

あ～～～ ！～（

「瞳子ー。 いつち来いー！」

『ヒツー・・・・な、なにボヨンー？』

肩をビクつかせ、まるで怯えた子猫の様に返す瞳子。

「いいから、来い！」

『・・・・・』

俺に言われ、恐る恐る近寄る瞳子。

「目を瞑れ・・・、そして歯を食こしばれ！」（よしー。"ターゲット" ROCK ON!-!）

「いいか？ 瞳子・・・よく聞いてくれ、あまり人と面と向かって軽々しく”バカ”って言つもんぢやないぞ？ それにな・・・さつきお前は自分に対してもその言葉を使つたな？ でもさ、オレは決して瞳子の事そんな風に思つちゃいないぜ？ 何故なら、あれだけ

米戸高についての詳細をすりすりと俺に語ってくれたじゃないか・・・  
・頭悪い奴にあんなマネ出来る訳ない、そりだらう・・・もつと自分  
に自信を持つってくれよ・・・な? 「

俺は、なるべく優しく語り掛け、ついでに彼女の頭もそっと撫でて  
やる。

『優斗・・・』

瞳子はつこわしきまで肩を震わせていた事が、信じられない位今、  
俺に身体をあずけてきてる。何故なら、彼女の両腕がオレの背中に  
まわっているからだ。

(ここつ、ほんと身体小さいな・・・俺の胸板に顔がすっかり埋ま  
つちまつて・・・腕もこんなに細くて・・・ホント、抱きしめたら  
壊れちまうそうだよ・・・)

『優斗の胸板って不思議と落ち着く・・・それに、なんだかいい匂  
いもする・・・』

『え? あ、ああ出掛けに風呂入ってきたからかな、ハ、ハハハ・  
・・・』  
(デキシとせんなんよ・・・柄にもなく、動搖しちまつたじやねえ  
か・・・)

『あれ? 今ひょつとして、心臓の音が聞こえたような気がしたボ

ヨン?

(しまつた・・・)

「や、さあな・・・や、気のせいじゃねえの?」

我ながら苦しい言い訳、瞳子はそんな俺に対し悪戯っぽい笑みを浮かべつつ

「へえ～・・・だつたら、いんなコトしねやおつかなブンブン?

6

ପାତ୍ର

(む・ム・胸が、小ぶりだが中身はさぞかし形の整つた”口ケツト  
”が・・・ひょえ～～は、早まつちや、い、いかんぞ？ 瞳子君  
？！)

『フフフ　・・・ゆうとつてば、お顔まつ赤つ赤あ～～～！』

「ギブ！、ギブアップ！、本当オレが悪かつた～～～！ もう堪忍してくれえ～～～ ～～～！」

『分かればよろしく〜〜

6

そつぱつて瞳子は、よひやく俺を解放してくれた。

（ナンで謝つてんだよ、オレ！？ いつの間にか、立場逆転してる  
し・・・）

『ねえ？ デキデキした力二？』

（キイ〜〜、憎たらじいたらありやしない！）

「ブワア〜〜カ！ 誰がお子ちやまに興奮するかっての！ 顔洗つ  
て、出直してこ〜〜！」

『あ〜〜！ ワタシに”バカ”って言つたあ〜〜 ひどいプリン！  
さつきの「瞳子の事そんな風に思つちやいないぜ？」 や 「  
もつと自分に自信を持つてくれよ」 とか、あれ全部ウソだつたの  
ボヨン？？』

「チゲーよ、よく聞いてろよ！ 今オレは、”ブワア〜〜カ！” つ  
て言つたの！ まったく、ブワア〜〜カ！ 】付ける薬ナシだぜ（  
しみじみ）・・・」

『「ゾモみたいだボクン……』

(ガーン……お子ちゃん、"ゾモ" 言われてもた……  
・オレ様のプライドが……むづいなつたら……)

(アレつかね～～と )

前フリ省略、説明後述  
「生活習慣……」  
駄目人間堕穀堂舌だめにんげんだからどくとうつ

『？？？』

「瞳子・・・お疲れさん・・・良くそこまで、自分の魅力を最大限に引き出して頑張ったな！ オレの負けだ・・・でもお前は本当に偉いよ！・・・ここまで到達するのも、並大抵の努力じゃなかつた筈だよな？ 僕には分かる！ 痛い程良く分かる・・・マジで嬉しいよ、お前みたいな一番弟子を持つて・・・瞳子・・・お前は僕の誇りだ！！ やばい！・・・グスツ・・・嬉しい筈なのに、田から汗がこみ上げてきやがった・・・よりもよってこんな時に・・・つぐづぐオレは駄目な師匠だよな・・・可愛い弟子の門出だつてのに・・・」

『いや、ワタシ別に何にも心当たりないピヨン、てゆーかワカシいつ、ゆうとに弟子入りしたんだブ〜？』

「はつはつは、瞳子は昔からほんとそそつかしいな・・・」ワタシ”が”ワカシ”になつてるゾ？ まあでもこれが、お前なりの精一杯の”照れ隠し”なのかもな・・・」

『話についていけないピヨン〜ん・・・』

「ゴメン、ゴメン・・・ちょっと前置きが長すぎたな・・・反省、反省」

「本題に入るよ、実はな瞳子がこれまで頑張ったご褒美にだ、”松延瞳子さんYUUTO流処世術免許皆伝おめでとうパーティー”を、ささやかながら2人でお祝いしたくてね・・・」

『お祝いしてくれるニヨリ!? ワタシ免許更新とか、いまいち良くな分からぬナリが、なんか楽しそうアル!!』

『「ひらひら、一部口調が口助になつてるゾ? ボケ(文字数のムダ遣い)も程々にね・・・」

『実は米戸部駅前にある、高級中華の名店”漫珍楼”に14時で予約を入れといたんだ・・・あー、お金の心配は要らないよ? 僕のオゴリだから、好きなだけじ馳走するよ! (全部ウソだけどな)

』

『高級中華ポ・ポ・ポ・ポ〜〜ン ワタシ中華料理大好きアル〜〜〜!! でも14時つてコトはだピヨン・・・あと15分しかないアル〜! どうするアルか〜〜!?

『瞳子がこんなに喜んでくれるなんて・・・オレもマジ嬉しいよ! でも、そういうば本当に時間無いな・・・仕方ないから君だけでも、先に行つて待つててくれないか?』

『ゆうと・・・一緒に行つてくれないナリか?』

「『めんね、ちょっと野暮用があつてさ・・・でも大丈夫！安心して？ 少し遅れるかもしれないケド、必ず駆けつけ（ない）るから……！』

『了解アル セうと決まつたらこうしてはいられないナリ！！ ダッシュで先に行つてるアル！！ あちよ~~~~~！！！』

びゅん

（あ～あ、ハイスピードで行つちまつたヨ・・・可哀想に、騙されても露知らず・・・）

（それにしても・・・ふくふく・・・つぐづぐ単純なやつ）

（え？ 良心が痛まないかって？ しゃらくせえ！ そんなモンとつぐの昔、どつかに置き忘れてきちまつたよー！・・・全くいつも、こいつも、オンナなんて・・・所詮みんな一緒にー！・・・クソッタレが・・・）













## 第5話・Little devil & satan(後書き)

新キャラ（ ）登場しました。これから、ちょくちょく出していひかと思います。

それと主人公、最後ちょっとぴり”Darkチック”になりました。  
”駄目人間堕穀堂舌?”（だめにんげんだからどうした）に関しましては、

「必殺技」とか「奥義」といった大げさなモノでは無く  
あえて「生活習慣」とさせていただきました。

理由は・・・まあ、なんとなくです。

肝心の効果は、必死に演技して、相手を騙くらかすだけといつ・  
これまた微妙ですね。

まあ、最低な技である事は間違いないですが（笑）  
尚、使用後”長時間眠りこける”等の副作用はありません。

「生活習慣」だけに、普段の規則正しい生活を送っていれば、未然に防げる筈ですので・・

## 第6話・畠下がりの困ったちやん ～その壱～

前略おフクロ様、今俺はやつとの思いで教室に辿り着いた所です。ドアを開け中に入ると、何処かクラスメイト達の様子が変なのです。何故だか分かりませんが、教師も含めクラス全員、皆一斉にこちらに注目し出して、ざわつき始める有様です。どうしてこんな状況になってしまったのか、皆田見当もつません。このまま全く事が呑み込めず、手をこまねいている訳にもいきませんので、まずは行動を起こしてみようと思います。遠い空で、この不思の息子を、どうぞ温かく見守つてやつて下さい。

追伸・・・・出掛けに持たせてくれた弁当は、とても美味かつたです。ただ、出来れば次からは、梅干を抜いてくれると有り難いです。

(クエン酸には不自由しませんので)

現在時刻、午後2時02分

(さてと・・・・そんじやほとぼち<sup>アクション</sup>行動に移るか・・・)

「ついーす、来る途中、獅子舞の格好したグラサンでパンツ一丁の、変なオッサンに絡まれて、そんで遅れましたー」

??「死ね！ 世の中で俺より顔が良くて、仕事が出来て、金持ち

の奴全員死ね！ ついでにフザケた遅刻の理由を  
ぬかすテメエも死にくされ！！ ヴォケエ！－！」

「キツぅ！」

？？「やかましい！ テメエみたいな奴は、今すぐ真っ赤な全身タイツ着て、闘牛場の真ん中に立て！！ そんでタイツの色だか自分の血だか分からん位、牛の角で体中突き刺されてくたばりやがれ！ アホンダラ！－！」

「想像しただけで、アイタタタな話なんで悪いケド辞退させてもらひうよ・・・」

？？「心配するな、赤タイツはこっちで用意してやる！ スペインまでの片道航空券は自前でなんとかしろ・・・」

等と、俺とのやりとりで、果てしなく人間性に？マークが付くこの男、<sup>しまに</sup>「島谷 <sup>じてまさ</sup>固手正」<sup>じてまさ</sup> 通称”コテツちゃん”、角刈りのヘアスタイル <sup>ドス</sup>and”着流し”の中にサラシを巻き、片手で懐の小刀をちらつかせるという、まるで大昔の任侠映画から飛び出してきたんじやないかと思わせる年齢29歳、一応この米戸一高の教師（カタギである事を切に願う・・・）である。担当教科は世界史、ちなみに俺のクラス担任ときている。

教室全体が微妙な空気なのを察したらしく、『トトロちゃん』は一旦、小刀を引っ込みで俺に問いかける。

「『ホン・・・まあやつせのせ』冗談として、度会おめえ何でこんなトトロ来てんだ？」

「へ？ 何言つてんだよ、『トトロちゃん』 オレは、学びに来てるに決まつてんでしょ？ がよー（ただでさえ出席日数やバインだから・・・）」

「変だな・・・昨日おめえの家に電話したら留守だつたんで、FAX送つといった筈なんだがな・・・家人から何にも聞いてないんか？」

（あーせつこえば、出掛けにモモけやんそんなよつたような・・・もしかして、『コレ』か？）

俺はズボンのポケットから、取り出した四つ折の紙を広げて内容を確認する。

するとそのB5サイズの用紙には、上から男女別であつてお順に並んだクラス全員39名分の名前が上半分、下半分には各自（おの）の苗字が書かれた座席表などが記載してあった。

一見すると、別になんの変哲も無いただの連絡事項である。

ただ一つ気になる点を除いて・・・

「度合よ？　おめえ顔色青いぞ？」

「……あのや、質問していいスか？」

「ああ、構わねえぜ、教師は生徒の質問に答えてなんぼのシゴトだからな」

「あんがと……じや、お言葉にあまえて……」  
「……」  
県立米戸部第一高校一年四組の教室で間違い無いよ  
ね？」

「当たりめえじゃねえか、何言つてやがんだ……」

何故かニヤニヤしながら返答するコトツちゃん。

俺は用紙を傍り、「……」、教室のある一点を指し示しながら

「じゃあ何であそこの席で、見知らぬヤツが座つてんの？　あそこ、  
オレの席の苦じやん？　……つーか、この教室オレが知つてゐるやつ  
誰も居ねえし……これつて、どうコト？」

俺がそう言ひと、コテツちゃんは、お手上げ、のポーズで嘆息し、さも呆れたような口調で

「まつたくもつて、おめえつて奴は・・・」

「な、なんだよ？ 教師は生徒の質問に答えてなんぼじやないんかよ！？」

「・・・クックク、とこどん往生際が悪いやつちやな、度会よ？ おめえもホントは自分で薄々気付いてんだろうが？ ・・・まあいいや、この俺様がアホのお前にも分かる様に、説明してやる！ いいか？ よく聞け、お前も知つての通りここは一年のクラスだ！ ズバリてめえは入つて来る教室を間違えたんだよ！ 一年四組・出席番号20番 度・会・優・斗・君よお！・・・」

”一年”と度・会・優・斗を、<sup>オレのフルネーム</sup>殊更強調して、教室全体に向け言い放つコテツちゃん。

「・・・さいですか」

（やつぱしな・・・FAX用紙の上部にしつかりと書いてあるもん

な、”一年四組クラス名簿（仮）”って、これが俗に言つ  
休みボケここに極まれりつてトコか・・・）

（てか、ヒドクねえ？ 分かつてたんなら、オレがココ入ってきた  
時指摘してくれよ！？ ただでさえ、あんなデカイ声で皆に聞こえ  
る様に言われちゃ・・・）

ザワ ザワツ

（ハイ！ もれなくこうなりますね・・・後輩のみんな！ 予想ド  
ウリのリアクション THANKS ! ! ）

もはや完全な、この場<sup>アウェイ</sup>違<sup>アウェイ</sup>いの空氣に耐えられよ<sup>アウェイ</sup>う筈もない俺は、静  
かに教室を出て行こうとする。

そしてドアに手を掛けたその時、背後から一言。

「待ちな！ 究極天然コゾウ！」

「何スカ？ 、究極変名の”島谷<sup>しまだに</sup> 固手正<sup>こてまさ</sup>”大センセ？」

「そういうやおめえ、また外靴で校舎に入つて来やがつたな・・・前  
からあんだけ口を酸っぱくして、校舎内は”土禁”だつて言つたの  
によ？」

「教室内で雪駄履きのアンタが言つたなや・・・」

「あ？ もうペんぱりしてみるやつ？」

俺は「トトロちゃんに向かなおじ

「ああ！ 何遍でも言つてやんよ、ダッセー格好しやがつてー。この完全時代錯誤の勘違いドS教師があーー！」

「野郎！」

言つが速いや、「トトロちゃんは懐から一瞬で、抜き身の小刀ドスを俺に向けて構える。

そして例の如く場クラスが瞬間に凍りつく。すると奴はそれを感じ取ったのか

「なあ～んちやつて　」

とコトツちゃんは、マイナス百万ドルの笑顔で何事も無かつた様に  
ドスを引っ込めた。

「もう遅えよ！　つたく何を今更・・・つーか、これっぽっちも可  
愛くないし、むしりアンタのその表情怖えよ！　」

するとふて腐れたように

「チツ・・・・・・あー、もうヤメだ！　ヤメ！　度会よ？　おめ  
えのせいで授業ドコじゅねえやー　今日はもう氣分が乗んねえから、  
俺は帰るぜー！」

一方的に言い残し、教室のドアを開け放しで、職員室へと帰つて  
いくオレの元担任。

(えへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ  
サン・・・・)

こうして、訳が分からぬまま完全に取り残された形の、俺 + 約40名の後輩達。

やがて堰を切った様に、教室のあちこちから声が上がる。

「ありえねえ！ 何なんだ、一体！？」

「ああ、先生昨日の入学式でも、あのヤクザみたいな格好してたもんな・・・」

『私、とんでもない高校に来ちゃったのかも・・・』

「つーか、ここ県立だろ？ なんであんなのが大手を振つて教師やつてんだよ！？ PTAも教育委員会も何考えてんだ！？」

（まあ、無理もねえな・・・見ず知らずの、お前等の気持ちも尤もだ・・・オレだって一年前に全く一緒のことを思つたぞ・・・）

『でもあのヒト、スゴクない？ あの島谷先生と互角に渡り合つてたわよ？』

「そうだな、一步も引いて無かつたもんな！ とてもマネできねえよな・・・」

「マジ尊敬に値するよ・・・つーか怖くないんかな？』

（チゲーよ！ オレだってかなりビビッてんの！ 成り行きに決まつてんだろう？ じゃなきゃ、誰が好き好んであんなヤクザ教師と・・・）

『あの男確かに、一年の”度会”って言つてたわよね？ 教室入つて来た時から、あたし結構気になつてたんだけどかなりイケてない？』

『そうね、最初ネクタイして無かつたから分かんなかつたけど、やっぱセンパイだつたんだわぞ！ 少しヤンキーっぽいけど、あんたの言つ通りかなりの上玉ね・・・』

『でもまあ、あの右耳のピアスはどうかと思つけど、背はそこそこ高そうだし、ああして黙つてればクールっぽいし、容姿だけなら私的にはアリかもね・・・』

「まあ、悔しいけど男の俺から見てもスゲエいい男だよな・・・つか神様不公平だぜ！ 母ちゃんも、オレをもつとイケメンに生んでくれりや良かつたのによ～！」

『てか、あんたも僻んでじやないわよ！ ああ！ でもこうして見てみると、ホントあたしの好みだわあ！ 鼻も高そうだし、なんといつてもあの眼よ～！ くつきりの二重まぶたに蒼みがかった瞳・・・

・ あんな眼で見つめられたらアタシ・・・』

「カラコンでも入れてんじゃねーの？ ジャなきや、あの黒い髪色と全然合わねーべ？」

『うつさい！ アンタ、夢を壊すようなコト言つんじゃないわよ！』

『けどさあ、あればマジウケたな！ フツー、一年と一年の教室間違えないもんなあ・・・』

(クソッ・・・) いつ等好き勝手な事言つてやがる・・・でもまあ仕方ねえか、こんなの今に始まつたコトじゃねえし・・・)

俺は軽くブルーになりながらも、踵を返し教室を出て行つた。ある。

『え～！ センパイ、出て行つちゃうんですか～～～？』

『メールアド教えて下さ～～～！』

『彼女はいるんですかあ～～～？』

（勘弁してくれよ！　どうせこんなの最初だけなんだ・・・今あつた事も、あと何日かすれば、みんな何事も無かつた様に自然に忘れる・・・この娘達が惹かれてるのは、あくまでもオレの外見だけさ・・・君等には悪いけど、直にメリッキが剥がれるオレに幻滅していく姿がはつきりと田に浮かぶよ・・・だから放つといってくれ！・・・それにもうオレは・・・）

一年の教室を出た後、俺は先刻コテツちゃんに指摘された通りに、昇降口の下駄箱で内履きに履き替える。

（あ～あ、最初からこいつしてれば少なくとも、あんな事にならなかつたかもな・・・）

下駄箱には、それぞれ各自の使用スペースに名前が書いてある。ましてや、学年」とにエリアが分散してる為、よほどのおバカさんで無い限り、下足から内履きに履き替える際、なんらかの違和感に自ら気づきそうなものである。

尤も、横着して履き替えたり、そうしなかつたりの普段からだらしない自分が招いた結果ではあるのだか。

それと今にして思えば、家を出る際にモモちゃんが弁当と一緒に持たせてくれた、コテツちゃんからの連絡事項が書いてある例のF A

×用紙にも、来る途中に一度は田を通じておべべきだったと、悔やまれるのも後の祭りである。

(わうわう、しっかりと確認しねえと……)

俺は本来の一年の教室に向かいがてら、事前に新しいクラスの予備知識を少しでも頭に叩き込む為、改めて用紙を確認する。

(えへと、おつ！ ラツキー！ またゲンのやつと一緒にクラスだ、あへ、去年一緒にいた瞳子の名前はねえな……あいつが居ると結構退屈しなくて済むんだがな……あの面子は大体が知ってる連中ばかりだな……それと、新しい担任は……武下先生？ ああ、あの50代のベテラン女教師か、あんまし馴染みがねえが、基本的に生徒思いの優しい先生って評判のヒトだ……コテツちゃんじや無くてある意味助かつた……他特に変わったコトはと……ん？)

「なにい……!? ど、ビリしてオレの席が教壇のまん前なんだ？……」

(サイアクだ……初っ端からこれじゃ……)

心なしか、階段を上る足取りが重い。

途中、二、三人の同級生たちと無言ですれ違つ。

(あへ、帰りてえ……)

そんな事も思いながらも、俺は一階の一一番奥にある2年4組の教室

のドアを開ける。

幸いにも、今は5・6限の間の休み時間らしい、中に入つて来た俺に注意を向けるヤツは、ほとんど居やしない・・・等。

『おはおひ度会君、もつお風過さだけどね』

「ああ、オハヨ・・・」

「よお、度会！ オ前昨日遊びしたんだよ？』

「寝てた』

俺は、新クラスメイト達との挨拶もそこそこ自分の席に着く。するとこりからに一人の生徒がやつてくる。

「優斗！ なんで昨日始業式来なかつたのさーーー？ 僕、めつちや心配したよーーー！」

「トップシークレット・・・ま、強いて言つなら、”副作用”ってトコだ・・・』

「え？”副作用”？』

「知りたいか？ だがな、一度知つちまつたらもう、後戻りは出来ねえぜ？ 何たつて禁断の・・・』

「別にいいよ、興味ないもん』

「シヨツツツク！　HEY、セイの少年？　つれないコト言つなよ、  
悲しいじょんか・・・でも！　俺、オマエのそういうアドライな所  
も大好きだぜ？」

ドコツ

「ホゲヒヒヒヒヒヒ！」

「あつ、ゴメン・・・」

「あつ、ゴメン」じゃねえ〜〜！　なして、コチとら教室さ入つできで早々、イスあだまさ殴られんといげんのよ〜？」

「なんかチョイキモかつたんで・・・てへ」

（まったく・・・軽いジョークに遠まじいツッコミで返してきやがつて・・・）  
「これ以上頭悪くなつたらどう責任とつてくれんだ・・・」

「・・・」

「ねえ、優斗？」

「何か言つたか？」

「いつになつたら、僕の人物紹介してくれるの？」

「やなこつた！お前にアタマぶん殴られたショックで、軽く記憶が飛んじましたよ……だから、無理！！」

「……いいもん、いつなつたら、自分でするから……」

「は？」

「皆さん、始めて！僕、”正岡元規”つてあります。ちなみに、あの有名な文学者と一字違います。優斗とは高校に入つてから知り合いました。僕の簡単なプロフィールは、身長171cm、体重56kg、乙女座のO型です。趣味はたまにギター弾いたり、ゲーセン行って遊んだりとかで、あと最近は、バイクの免許も取りたいなあ～なんて思っています。こんな感じで、そのへんの同世代とあまり変わらないと思います。苦手科目は特に無く、スポーツも大体そつなくこなせます。自分で言つのもなんですが、人当たりはいい方だと思うので、先生方や周りの友達からの受けは良いと思います。それと外見は人から、某男性アイドルユニットのあの人によく似てるってよく言われます。後半、なんか自慢みたくなつてしまつてどうもすいません。だいたいこんな所かな……」

「よくもまあ、長々と屈託も無くそこまで話せるな、この自分フェチ男が……」

「やつぱ、最初が肝心かなあ～て

「まあ」苦労さんと言つてやりたいのは山々だが、お前に一つ悲し

い知らせがある 「

「えつ？」 「

「クラスの連中は、誰一人としてお前の自己紹介を聞いて無かつたんだな、コレが・・・」

「そんなあ～」

「そんなこんなで休み時間も終わり、その後6限目の授業、帰りのSトボームルームHRと無事に過ぎて行き、俺とゲンは下校途中の昇降口付近で、他の愛の無い話に花を咲かせていた。

「でもホント良かつたよ、また優斗と一緒にクラスで！」

「そんなもん、確率は四分の一じゃねーか？」 米戸一高はただでさえ、全学年4クラスずつしかねえんだから

「確かに少ないよね・・・ってそうじゃ無くて！ 優斗は僕と一緒にクラスのクラスは嫌なの！？」

ゲンは何故かこんな不良のオレに對して懐いて？くれてる。お互い全く正反対のタイプにも関わらずにだ。勿論俺にとつても、数少ない大切な男友達である事に変わりは無い。

「そういう意味で言つたんじゃねえーての！ 誤解すんなよ、オレ  
だってゲンと同じクラスで、ホント良かつたと思つてるぜ？」担任  
の武下先生も優しそうなフツーのオバちゃんだったし、「オバちゃん」  
ヤクザ教師とは大違いだしな……」

「あの先生もキョウウレツだったからねえ（笑）……悪いヒトじゃ  
無いんだケド」

「だな……」

「だけどさ、瞳子ちゃんと離れ離れになっちゃったのは、ザンネン  
だつたな～ 去年は三人一緒にクラスだったのに……」

ヒゲンは少し寂しそうにポソリと呟く。

「やつにえれば、やつときオレ瞳子のやつと校門の所で会つたぞ？」

「え？ ほんとに？」

「ああ、5限目の中辺りだったか……なんでアイツあの時間あ  
んな所でサボッてたんかなあ？ ゲン、お前なんか心当たりないか  
？」

「さあ……でももしかしたら……」

「ん？ なんかあるのか？」

「これは僕の想像なんだけどさ、多分例のコスプレの事じゃないの  
かな……彼女、新しいクラスは3組になつたんだけど、その担  
任結構厳しい先生で、確かに限目つてゆうと瞳子ちゃん達つてその

先生の授業じゃない？ そこで何か一悶着あつたんじゃないかなあ。  
・ ・ ・

「なるほどな、考えてみればウチの女子の制服はブレザーに膝下スカートだもんな・・・ 一人だけ、セーラー服で超ミニのやつが居たらそりや、目立つて仕方ないか・・・ 納得」

俺はいつもながら、ゲンの完璧な分析能力に内心舌を巻く。そうこうしてる間に俺達は、学校創立者の胸像がある中庭付近に差し掛かり

「じゃあ、僕こっちだから バイバイ！」

と一人駐輪場へと向かうゲン

「ああ、じゃあな！」

「うん！ また明日ね！」

ゲンと別れた俺は、校門を出て僅か50m程のバス停に足を向ける。

（そろいえばゲンのやつ、チャリ通学だつたよな・・・ いいよなあ、自宅から10分弱で通える距離のヤツは・・・）

そして俺を含め約二十名程を乗せたスクールバスは、米戸部市内を駅方面に向けて走り出す。

（あとは真っ直ぐ帰るだけ、もう流石にトラブルは起きねえだろ・・・

・ ）

俺の漠然とした考えには、半分願望も混じっていた。





## 第6話・廊下がりの困ったちんちゃん～その2～（後編）

やつぱり、何をするにしても事前にしっかり計画を立て、後でちゃんと確認しておいて大事ですよね～～とゆう教訓でした。

某消費者金融のこもーは一切関係アリマセン

●トガリの困ったちゃん ～やのね～（前編）

とつあえず、先に謝りておきます・・・・

## ■下がりの困ったちゃん ～その続～

バスが米戸部駅前のロータリーに入っていく。

停車後、俺はバスを降りて駅構内に向かおうとする。

隣接する駅ビルのすぐ側まで差し掛かるかという時、後方からとてつもない殺気が俺を襲つ。

振り向いた先には・・・

『 ゆ・う・と ～～～～～』

そこには、鬼の形相したへそ出しセーラー美少女が一人。

おまけにツインテールの髪を両方逆立たせ、背後からは禍禍しい鬪気が立ち昇る。

「ゲッ！ 瞳子！？」

『 よくもワタシを騙したアルね～～～！！ あの後”漫珍楼”に行つたら、”当店では、度会様といつお名前でのご予約は承つております” って言われたナリよ～～～！！』

「ま、待て！ 落ち着け？ 話せば分かる！ な？」

『 問答無用～～～！！ 銀河に変わつておしおきアル！！！』

そつ言つて、瞳子が鞄から取り出したのは刃渡りおよそ30cmの中華包丁。

「ちよ、ちよっと待て！ お前、その包丁……どうしたんだよ？」

「

『腹いせに、厨房から盗<sup>パチ</sup>つてきたアル』

さらりと言<sup>ハ</sup>い放つ艶姿窃盜ガール。

そしてジリジリと俺との間合<sup>ハ</sup>いを詰めてくる。

「あ、あのう……瞳子サン？ その物騒な凶器<sup>ハ</sup>は、出来ればしまつてくれません？」

『ヤクザ教師<sup>コテツチャヤン</sup>とは違つた意味での、キガイ<sup>ハタレ</sup>に刃物<sup>ハ</sup>』 状態の瞳子を前にして、思わず戦慄<sup>ハ</sup>を覚える俺。

『覚悟は良いアルか？ アイヤー！』

瞳子は奇声を発しながら包丁を振り回し、俺に襲い掛かる。

「ノオオオオオオオ！」

（マジだ！ マジでオレを殺<sup>ハ</sup>だこいつ……）

シユバツ

刃が俺の顔前を掠める。

すると自身の髪が二、三本はねりながら落ちてゆく。

「ヒイツ！」

情けない声を上げる俺を嘲笑うが如く、第一波の攻撃がアツパー氣

味に下から繰り出される。

「うわっとー」

間一髪で何とか避けた拍子に、俺はバランスを崩し後ろに尻餅をついてしまった。

（こままじや、殺ラレル！、何とかしねえと・・・それにしてもここまでシャレが通じんやツだつたとは・・・）

（こりゃ、覚悟を決めたほうがいいのか？ ああ・・・でもアイツ、この位置からだと、へそ出しセーラーの下からブラの形がモロ見えだな・・・あとビミョーに、ミースカの中のパンティが白っぽいのもな・・・これはある意味ラツキーッてか！？）

思わず心中で念仏を唱えたくなる衝動に駆られながらも、それと裏腹に、煩惱まみれの思考が俺の脳内を支配する。

（つてそつじやねえ／＼！ バカか！ オレは！？ 余裕ぶつこいてるバヤイじやねえだろ？が！？ この状況がどれ程ヤバイか解んねえのか！？・・・）

俺は脳内全体の約70%を占める、救いよの無い現実逃避癖を無理矢理追い出して、若干我に返る。

次に、この不利な体勢を打破すべく

「よつこらせつと・・・」

これで、ようやくと田前の”恐怖の料理人”から逃走する算段が整つた。

き・・・「工」, m st und up ! ! うん、何でスバラシイ響

俺は立ち上がつたついでに、尻餅をついた際、スラッシュに付いた埃を手で軽く払う。  
そして、そんな俺を見て何故か固まつてゐる瞳子から、すばやくから  
中華包丁を取り上げてこのスペシャルバイオレンスな光景に終止符  
を打つ。

（はあ？ 何言つてやがんだ瞳子のヤツ……たかが腕を掴んで包丁を取り上げただけじゃねーか……リアクションが大袈裟だつづーの……）

（ほら！ 瞳子<sup>オマエ</sup>が大袈裟に騒ぎ立てるもんだから、野次馬<sup>ギャラリー</sup>が集まつて来ちまつたじやねえか・・・）

「いや、たいした口トじや無いんス！ ちょっとした痴話喧嘩なん  
デ・・・ほりつ！ 瞳子の口からも何か言つてくれよ？」

俺は群衆に向け必死に弁明しつつ、瞳子を落ち着かせる為、優しく肩に手をやろうとする。

『イヤッ！ 近寄らないでアル！！』

瞳子はまるで汚物を見る様な目つきで、俺から後ずさる。

「えっ？ 瞳子、何言つてんだよ！？」

今気づいた事だが、瞳子だけでは無く周りを取り巻く（野次馬＝群集）全体が、老若男女問わず俺一人に対して敵愾心を露にしているらしい。

そしてよくよく、野次馬一人一人の視線の先を追つてみると、共通して俺自身のある一点に集中している事が分かる。  
それにつられて、俺も”其処”に目を向ける。  
すると、そこには・・・・・・

! ! ! !

（尻餅ついで立ち上がつたら、あ～らビックリ！ついでにアソコ  
も　s t u n d u p ！！　つてかい・・・・・・・・）

「この力ギヤ！」 真っ直ぐから何をひとんねん！！！ このクサレ  
外道が・・・」

イヤだあゝ  
ウチ キモい

「おい、あいつ米戸部一高の制服だよな？・・・

ホントだ・・・サイアケ～～～！ マジ死んでてカンジよね～

5

（なにい～～～！？ 野次馬の中に”米戸一高”の生徒が混じつて  
やがつたのか！？ ．．． ．．． マズイぞ！ こりや ．．． ）

（でもよ・・・それにしたつてオレは何故こんなトコ立たしてんだ?  
我ながら全く心当たりねえぞ!? つーかいい加減に治まつ  
くれよ・・・オレの体よ〜〜〜? ）

俺は、この自分が置かれた状況にまじまじするばかりで、收拾の目処すらつかない。

誰に助けを求めるでも無く、何氣に瞳子に口をせざる  
そんな彼女は相変わらずの、へそ出しミニーの悩殺ルックである・・・

(ん?  
惱殺!?)

ふいに数分前の記憶がよぎる。

(あん時、確かに・・・瞳子の攻撃を寸での所でかわして・・・バラ  
アタック

ンス崩したオレは尻餅ついたんだよな・・・んでもってそのままの体勢から・・・へそ出しセーラーの中が見えて、ブラが・・・！ そうだ！ あと//ースカからの・・・パンチラ！ 成る程・・・

何かに例えるなら、ジグソー・パズルの空白部分の一つが埋まつた様な感覚に至る。

だが、まだ完璧では無い・・・決定的な疑問がのこる。

（そりや、オレだつて健康な一人のオトコとして、至極真つ当な反応でしょ！？ あんな結構なモンお皿に掛けられた皿にや・・・ 生理現象だら？ 言い換えるならコレは男の性よ！？ さがにこの連中と来たら、何を曰くじら立てここまで言い放つ！？ 納得いかねえぞ！？ 元をたどれば、こりや成り行き上の事故だぜ？ ）

「皆さん！ 聞いてくれ！！」

「「「「？」？」？」

「先ほども言つたが、飽く迄もこれはオレとこの場に居る瞳子の・・・云わば一種のコミュニケーションだ！ 従つて、野次馬に俺等のコトをとやかく言われる筋合いは無い筈だ？ 確かに、お見苦しい物を見せてしまつた点は謝る！ だが、”クサレ外道”だの”死ね”だとかつてひど過ぎねえか？ どうよ皆の衆！！」

周りが、一瞬静まり返る。

（フツ、決まつたぜ！）

「この鬼畜ヤロウが・・・」

『開き直りも「」まで来ると、手に負えないわね～』  
「」の変質者が！

(えつ?  
えええええええ!  
)

「何故!? オレは誰にも迷惑掛けてねえだろ? が! ?」

『よく言つわよー。そんな”モノ”持つて・・・』

（そんな”モノ”って何だよ？ ああもしかして）の中华包トの「  
トか？ ）

「包丁がどうしたよ？」

俺は声の主と思しき20代後半のOL風に、右手に持つ黒光りしている（“アレ”では無い）中華包丁を見せ付けた。

『嫌つ！ そんな凶器近づけないでよ…！』

「いやいやいや！」コレは冗談と言えば瞳子のヤツがあつ！――

（も、もしかして、もしかしなくても・・・包丁<sup>コレ</sup>が原因か？・・・  
・・・）

一旦、整理してみよう・・・

最初に瞳子が中華包丁で、俺に襲い掛かってくる。

俺は避けてバランスを崩し、尻餅をつく。

「こじで”第1のポイント”、ブラ見え+パンチラ・・・この時点で”マイノリ”はエライ事に。」

やがて、俺は尻餅をついた体勢から立ち上がり・・・えと、それから・・・・・

そうだ！ その後俺は自己防衛の為に、瞳子から中華包丁を奪い取つたんだ。どうやら口が、”第2のポイント”らしい

そしたら何故か、俺は野次馬共から鬼畜扱いされちまい、瞳子まで怯える始末・・・

（やつと分かつたぞ！ こいつの事か！）

要するに野次馬共には、包丁を持った俺が、瞳子を襲つてる様に映つたらしい。

更に始末の悪いことに、俺は”アソコ”をおっ立せながら、野次馬共に大演説？をのたまつた。

この事が連中の神経を一段と逆撫でして、もはや完全に四面楚歌状態に陥つた俺。

俺の脳内ジグソーは今、完全にコンプリートされた！  
そして出来上がりの作品が意味する重要なメッセージ。

即ち

# 【容疑者 ”度会 優斗”】

「おひつ！ 誰か警察つ！？」

(早速かい！)

『警察だけはダメ~~~~~！！！！』  
『優斗が退学になっちゃう』

今まで黙り込んでいた瞳子が、不意に口を開く。

（おお！ 天使降臨！ だが時すでに遅し……）

「すいません、ちよつと通じて下さい！」  
なにかありますか？

と、多数の野次馬共を搔き分けて、チャリに乗つた一人の警官が現れた。

言わずもがな、俺にとつて天敵と言つて差し支えない。

「どうも、いつもねえよー！」のガキ事もあるうじ、眞つ昼間からわづちのお譲チヤンに乱暴しうつとしてたんだよーー。」

代表して一人が答える。

俺も負けじと

「さけんじやねえ！ ンなもん言い掛けりに決まつてんだろ！」

すると、別のオヤジが

「じゃあ、テメエが持つてんの包」と、おっ立てた“ソレ”は、どう説明するんかい？」「

俺は恐る恐る、自分の下半身に目を向ける。  
大方の予想通りそこには、相変わらずのやんちゃボウヤが存在して  
たワケで・・・

（オレってば今もこの状態かよ！  
て素晴らしいネ？）

「はあ・・・」(なんか、これから先を思つと一気に疲れが押し寄せてくる・・・)

女A 「嫌だわ・・・・・」  
 ハア ハア言つてる・・・・・・

男A この野郎!! ど、ど、ど、本性を現しやがったな!!!

このヘンタイ男!!

（なんつー恐ろしいコトござく！？ この”アベサダ女”（意味が  
解らない方は年配の人に聞いて下さい）め・・・）

俺は決意した。

もう一回なつたら、あの方法しかないと！ だがその前に・・・

優斗「みんな！ このオレに1分22秒だけ時間をくれ！！ この間に必ず治めてみせるから！！！」

男B「おもしけえ・・・やつてみるや・・・だが分かってんだろうな？ もしダメだったら、今日がお前の命日だぜ？ なあ！ 皆の衆、ひとつここは成り行きを見守ろうじゃねえか！」

群集「・・・・・・」

男B「異存は無いみたいだぜ？」

優斗「ワリイな・・・」

一人の漢によつて、周囲は一旦落ち着く。  
これで、この馬鹿げた惨状に終止符を打つお膳立てが整つた。

男C「READY～～～ GOッ！！」

俺は精神を統一し、アスファルトに仰向けに寝転がる・・・

次に目を閉じて体の後ろ全体に地面を・・・前全体に穏やかに降り  
注ぐ陽光を浴び・・・

イメージはそう・・・・・【天地と一つ】

## 脳内BGMはお決まりの

と、スタジオジーリから、訴えられても知らんぞという読者からのツッコミをよそに、今の俺はまさしく夢心地。

男B「ヨラア！！」

ゲシツ

男B 「やる気あんのか？」  
ああん？」

優斗「外野は黙つてな・・・」（痛えんだよ！）バカ！　肩をおもいつきり蹴ることねえだろ？が・・・）

男「どうでもいいけど、おたく時間ないよ？」

と、何処から用意したのか、ストップウォッチを手に冷淡に言い放つ男。

# 優斗「残りは？」

男 C 「36秒・・・」

（そんだけあれば、十分さ・・・）

俺には秘策があつた。

こういった事態を解決に導くとつておきの切り札・・・  
いきり立つアソコを萎えさせるにはもつてここの呪文。  
即ち・・・・・

【風呂上りのお母んのハダカ】<sup>か</sup>であるーー！

誰しも一度は遭遇した事がある筈だ。

誰も居ないと想い、さあこれからひと風呂浴びようかとバスルームの扉を開けた時、鉢合せた自分の運命を呪いたくなるあのひと時・

水気を弾かないことの上無い、逆に吸収したんじゃないのかと思わせるブヨブヨの肌！

ボンレスハムの様な腕の隙間から、覗かせる不十分な下処理故に、  
はみ出たボーボーの腋毛！

引力に逆らえず、無情にも下向きに垂れ下がる全く張りの無い乳！  
醜く弛みきつた見るも無残なメタボの三段腹・四段腹・五段腹！  
etc・・・

これ等複数の萎え要素を兼ね備えるのは、逆に至難の業では有る。だが、俺はあえてそのシユチュエーションをイメージする。

”未来への俺”に向けて・・・（そうしねえと、人生も小説も終わ  
つちまうモン・・・）

つて事でサバイバル開始！

俺は複数の悲鳴に驚き、目を開ける。  
ギラリー

に退散して行つたらしい。

何故なら、現在の俺は股間に”<sup>フォーティーフォー</sup>44口径ビッグマグナム”を携えているのだから・・・

俺の身体に起つた変化は、確実に先刻より悪化している。

（しもた！萎えさせる筈が、逆にアソゴが”エレクトリカルボンバイエ”状態やん・・・）

（WHY！？ 【お母んのハダカ】ってこんななんちゃうでえ～～～！？）

だが、俺は根本的な間違いを犯していた事によつやく気づく・・・

そつ・・・俺にとっての「お母ん」とはモモちゃんの事である！  
元ミスユニバース世界大会3位の極上美人の真っ裸・・・・・・

そして、周囲は絶対零度の空氣感。

男B「たいがいにしるや？ ぶつ殺されてえのか？」

男C「・・・あと10秒」

優斗（オレは”エレクトリカルボンバイエ”）発射10秒前なんだ  
がな・・・・

もはや俺には、どうする事も出来ず・・・

男C「・・・ゼロ！」

終に運命の時を迎える・・・・

男B 「これがてめえの出した答か?」

指をポキポキ鳴らしながら、じつにレスラーみたいな男が言い放つ・・・

優斗「ああ、とんでも無いモノが出(発射)ちまつたがな・・・」

そこから先はもつ・・・

じょりりおおおおおお

ズタボロに横たわる俺が居た訳で・・・・

辺りを見渡せば、怒りに任せて俺を集団でボコつた男達も、何時の間にか姿を消し・・・

『これがホントの立ち往生アルネ・・・』

「瞳子・・・居たな・・・ら其処のコンビニで・・・ティッシュ・シュー・買つ・・・」

果たして、俺の声がセーラー小悪魔の耳に届いたかどうか定かでは無い。









## ■下がりの困ったちゃん ～その赤～（後書き）

「おまえ作者何様だよー。」や、

「（前書き部分にて）謝る位なら、最初からするなーー！」  
等といったお叱りは「もつとも」テス・・・

それと、数少ない貴重な女性読者の方々に、大変不愉快な気持ちにさせてしまい  
大変申し訳無く思つております。

これからは作者自身、気持ちを入れ替えて真摯に取り組んでいく所存です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7606d/>

トラウマッ子世に蔓延（はびこ）る

2010年10月9日04時19分発行